収容所といえば、鉄線が三重に張りめぐらされ、警備のきびしさはどこの収容所よりひどかった。作業の行き帰り、ポケットの中まで調べる始末。ある一人の男、かぶっている帽子の中に、イワシの頭二個を塵捨て場から拾って来たという。昼めしの時焼いて食べるつもりだった。ソ連兵の塵捨て場だったので、拾えたのだ。我々日本兵の塵捨て場で、そんなもの拾えるはずがない。くれるものならだれでも喜んでもらっていた。捕虜のつらさはひもじさと、ノルマのきびしさである。でもそのイワシの頭二つは、警備兵にとりあげられたうえに、ビンタイッパツくらったのだから、わりのあわないイワシの頭だった。彼は元兵長、彼が言うには、あのイワシの頭二つは自分の命を十日は伸ばしたのに、惜しいことをした。本当のカルシウム剤だった。

昼はれんが造り、土堀り、トロッコ押しかられんがの積み上げと、それこそノルマ達成に自分の体力のすべてを使い果たしての毎日なのに、夜は共産主義の勉強、午後七時から九時まで二時間の講義は実につらかった。進むにつれてむずかしく、マルクス、レーニンの歴史から資本論まで、続けているうち講義は面白くなってきて、民主主義と、社会主義を論ずるようになってきた。人間は不思議な動物で、軍国主義時代には、社会主義は社会も罪悪だと聞かされていたが、毎日講義を聞かされるとそのような思想に染まってゆくことに、初めて気がついた。私など、思想が三回変わった。軍国主義から、共産主義、宗教へと…。

戦時中は一番人間の尊いことは、天皇陛下のため国のため親兄弟のために死ねることだ。二十五歳が最適だと教えられては、名誉の戦死こそ男と生まれたとるべき道だと、心の底から思いこんでいた。それほどに強烈な教育であったわけだ。

ナホトカは日本へ帰還のためのソ連の最終結地で、シベリア全土から、毎年捕虜たちはやせこけた身体を引きずって、移動して来るのです。入ソの時から、半分の数に減らされてだ。山での死亡と、山で残された者もいた。ナホトカでは我々中隊は二週間ほど滞在、そこでは昼夜、マルクス論の講義だった。

ナホトカの港とはいうものの、すぐ海が見える所ではない。帰国のためにつくった幕舎に入れさせられた。ここには何百人いたものか、付近一帯には一万人もいるとか言っていた。港の近くの幕舎が詰まっているときは、数十キロも奥のところにある幕舎に入れさせていた。港から遠ざかった連中は、いつ帰国できるかわからない。一年も幕舎の仮住まいのまま待機させられているとか、全く気の毒で、心細い思いをしているだろうと思った。

私たちは帰還部隊の第一分所だったので、非常に恵まれたほうだった。しかしまた、ここに入るとちょっと出られないなどとも言われていた。どういう組織になっているのかわからない。ただ、この港には専属の共産主義を指導するものがいたのではなかったかと思われた。民主グループの最後の民主教育の仕上げる場所であったようだ。ハバロフスクからきている宣伝教育者のアジ・プロだったろう。つるしあげも多かった。私は波止場近くの丘陵を越えて小学校と思われる建物の壁塗り作業使役を命ぜられて行くと、ここから真下にナホトカの港が見えた。この港へ帰還船が入ってくるのである。帰国が大体目の前にらさぶらさがっているので、みんなは気が軽く、鼻歌を歌いながら作業する者もいた。私も歌っていると、そばのソ連労働監督者も一緒になって合唱するというような、和やかな空気で、作業使役は少しも苦しくなかった。一週間もこの作業が続いたが、突然いやな情報が入ってきた。それは日本船の入港がおくれているので、我々はもっと奥地に行って作

業使役に服することになるとのことである。そんな馬鹿な話があるものか、今まであらゆる悪環境下で頑張りつづけてきたのだし、しかも作業中でも精力的に民主運動を闘いとったのだから、何とか優先的に帰国させなくては不公平になる。責任者はグループを通じてソ連政治部にかけ合ったのである。ソ連政治部は、我々の主張を認めたようで、近く試験を行って帰国を決定するとの快報が流れてみんな喜んだ。しかしソ連は、決めたあとから次々と変わるのは日常茶飯事なので、全く一喜一憂だった。滞在十日ほどして、講師が来て、「オイ皆、良く聞け」と叫んだ。「いいか、これから浜辺で一人ずつ質問する。答えられなかったら日本に帰れない。うまく答えた者だけが日本に帰れるから、慎重に答えよ」との命令、そこでざわめきが起こった。自分はもうだめだと落胆する者がほとんどであった。それから一人一人、呼ばれて試験が始まる。そばでながめていると、右に行く者と左に行く者がいる地獄極楽の別れ道。私の番がきた。小さい声が、耳の側に聞こえた。「いいか、よく聞け、戦争の起こる原因を、簡単に答えよ」というのである。ある晩の講義が頭に浮かんだ。「自国の生産物資が多量生産され、過剰物資となったのを外国に輸出する。同じことが別の外国にも起こる。輸出国を求めて販売合戦が始まる。ゆえに戦争に拡大されていきます」と答えた。「よし。右だ。ダモ－イ（帰還組）」現代なら物笑いの種になりそうな答えで、無事帰還したのだから幸運である。

今日も暮れ行く　異国の丘に
友よつらかろ　切なかろ

帰還船から夢の港、舞鶴港へ上陸したとたんに、桟橋のスピーカーから　〃異国の丘〃が流れた。胸のときめきを押さえていた戦友たちは、「下船せよ」との命令と同時に、我先にと元気百倍、、飛び降りて行く。残酷な世界から解放され、我が日本の土を踏みしめて立った時の感動は、筆で表せるものではない。近くに住む肉親たちは迎えにみえて、抱き合って泣く姿。元気でなあと別れて行く者。苦難の中で一緒の戦友たちとの一生の別れだった。今では五十年近く別れたきり、だれからも音信不通。別れた際に住所の確認がなかったせいだ。今でも時折思い出す。皆さん元気でしあわせに暮らしているだろうか。

足かけ九年振り、我が郷土を尋ねた。昔の宮古島の部落は、村ごとに疎開されていた。戦争の強制疎開後は、軍用飛行場に変わっていた。昔、隣りだった人に連れられ、新部落を尋ねた。山手の方で四軒建っていた。初めて家族のもとへ。家の中は角ランプの光で薄暗く、兄貴一人だった。「お帰りなさい。元気で帰れたね」「兄さんも元気だったね」「ところでお母さんは」と聞くと、「あちら」と一言。不審に思い、マッチで照らしてみたら、真新しい位牌。これがお母さんか。死んだことも知らずに尋ねてみた母の姿。その場で泣きくずれた。話によれば、終戦当時マラリアで倒れた。死ぬまで私の名前を呼んでいたという。右手にはシベリアからのハガキを握りしめて、息を引きとったとのこと。翌朝埋めた場所を一人で尋ね、つるはしで入口を起こして中へ入ってみた。頭蓋骨を拾い、「武雄は今帰った。お母さん」と泣くだけ泣いた。私は叫ぶ。この地球上に再び戦争が起きてはならんと。

【『平和の礎』（平和祈念事業特別基金）所収】

惨めな境遇の台湾疎開

宮　城　　文

率先して先発隊に

昭和十九年六月十五日に、八重山で初めて空襲警報が出て、その後戦局は緊迫し、七月頃から台湾疎開が叫ばれた。八月には老人、子供、婦女子の緊急疎開の命令が出たが、わずかに台湾在の家族、親戚のところへ個人疎開するだけで、集団疎開する者は全然なかった。

それは当時空と海の危険を恐れ、また郷土と生死を共にするという考えがあったからだった。九月になっても集団疎開者が無いので当局は困り果て、焦りだすのであった。そこで当時五十四歳の若さで後進に道を開くということで、国民学校の校長を退いて町内会長になったばかりの主人、信範は、わが家族を疎開させ、模範を示して後にこそ他所様へのお奨めができるということで、私に至急疎開の準備をするようにと出しぬけに命令した。

当時私は大日本婦人会石垣支部長の任にあって、愛国婦人会、国防婦人会、主婦会と三つの会を連合して婦人奉仕隊、勤労隊などといって、飛行場の整地、報国貯金集め、供出、献金、献納畑作り、南方行兵隊寄行時の食事や弁当の炊事、応召軍人の留守宅の農産手伝い、駐屯軍への野菜魚肉類の収集、慰問団派遣の責任を負う忙しい毎日であった。その重責から逃がれることは自他共に許さるべきことではないと渋っているところへ、山口町長が意外にも夫信範に同調され「自分からもお願いする。あなたが先発隊となって模範を示してもらえばそれに続く者がたくさん出るだろう。婦人会はどうにか都合つけるから」とのことでそれに励まされ、いよいよ疎開することに決め、準備に取りかかり、わが家は主人、義理の姉、弘子が居残ることになり、長女、三女、四女、五女、二男と私の六人疎開と決め、九月五日「宮城文家族六人疎開」と第一声をあげた。

まずわが町内からと三町内に希望を募ったところ、三町内はもちろん他町内からもたくさん希望者が出て、今度はうれしい悲鳴というところであった。乗船人員に限りがあって自分の町内を主として、十世帯四十八人、班長神村英喜氏、副班長宮城文で十班を編成して九月六日報告した。それを伝え聞いた他字も次々と疎開希望者が出て、登野城班、大川班が編成され、九月九日午前十一時十分、三隻の四十五トンのポンポン船にそれぞれ乗船し、舳先を並べて石垣港を出発した。生き別れか、死に別れか知れぬ愛別離苦の旅立ちで、涙の万歳の声は港を曇らせているように淋しく胸一杯であった。

空と海を睨んで敵機をうかがいながら合掌し、延命十句観音経を誦じ通しで西表島に一泊、与那国に一泊して、蘇澳南方に着港上陸した。

台湾の土を踏んだ時、初めて生きた心地がした。南方で夕食を取り、一泊して再びポンポン船に乗り夕方基隆に入港し、ポンポン船に別れを告げ、某寺で一泊して翌十三日午後三時出発、五日目で目的地員林街員林に着き町役場係員に案内され、員林東公学校の校舎宿泊所に着いた。

無理解と差別扱い

員林着後十月十六日、疎開者児童を一場に集めて服装を検査し、二、三の注意を与えて、父兄同伴で指定されている員林小学投に転入させに行き、代表して山岸校長に会い、四十人の転校手続書類を学年別にまとめて提出して一安心というところへ、次々と出る校長の言葉は余りにも意外で、ちと腹立たしくさえなったので、次にあげてみることにする。

一、これらの生徒は日本語が分かりますか。
二、日本語が話せますか。
三、父兄はどうですか。
四、あなたはいつ八重山に行きましたか。
五、先祖は日本人でしょうか。
六、あなたのような女は、八重山にもっといますか。
七、あなたの沖縄と宮古の沖縄と違いますか。

以上のような愚問に呆れた私は、一問ごとに力強く弁明した。

一二三、聞くこともできますし話すこともできます。家庭でも日頃標準語を使用しています。日本語などとは言いません。
四、私は元から八重山にいます。
五、先祖代々根っからの八重山の土人でございます。
六、八重山では十人並の女で、私より偉い方がたくさんいます。
七、宮古は沖縄に近い島で、八重山は台湾に近い島でございます。

以上の私の言葉で少しは理解してもらったのか、折角父兄も皆お揃いのようだから特別に転入式を挙げるから講堂に集まるようにとのことであった。そして父兄、全職員も加わって思い出深い転入式を挙げてもらった。そんな異例はめったにあることではないと思われて感無量であった。

学校では生徒間で八重山っ子の粗末な服装、アクセントの異なること、琉球人だという意識で異人種みたような眼で蔑視されるので、わが家の信治を初め、ほとんどの児は台湾の児童と仲良く友達になるのであった。台湾知名士の子供らのごく少数もやはり日本人子供にいじめられているので、同病相哀れむの気持ちであったのでしょう。

学芸会があって、一年生の桃太郎劇練習中、主役の桃太郎が疎開者のK君であると聞いて四、五人の父兄が、琉球人の主役では学校も父兄も面目ないとどなり込んできた。これが学校の大問題となり、緊急会議を開いたところ賛否両論が出て校長は賛成方であったが、とうとう主役を替えてしまったというゆゆしい奇談があった。最も神聖であるべき教育の場でさえこのような有様であったから、他は推して知るべしである。

残酷なマラリアとの闘い

それぞれの位置につき、一段落ついてやれやれと安心したのも束の間で、十月末からマラリアが蔓延した。老人、子供、若者までほとんどの者がこれにかかり、多数の死人を出し、言語に絶する惨憺たるものであった。狭苦しい室に二家族、三家族の者が一人か二人は枕を並べて呻吟しているし、時には看病する家族もなく全員やられている時もあった。

郷里との船便は遠く送金ができなくなり、さりとて働きに出ることもできず、貧苦と病苦にもがき、死人が続出する正に生地獄の感がした。それに葬式ときたら粗末な箱に入れてそのまま二人で担いで、また粗末な火葬場へまるで野良猫か、野良犬を捨てるような非惨なものであった。

東公学校での生活は三ヵ月余で昭和二十年一月には農学校、パイン会社の工場に移転させられ、その後は兵舎に変わるのであった。そして次々と疎開してきた新川班が加わり、まるで新川字内のようであった。マラリアはやはり移転後も猛威をふるって、疎開者を苦しめるのであった。このような状態で家族が死んでも泣く気力もなくなり、涙一滴さえ見せない母親もいた。

四月三十日、員林が初めて空襲され、その後も毎日のように警報が出て機銃掃射が続いたので一般住民に避難命令、疎開者には二次疎開を勧められ、わずかの者が一世帯または二世帯一組になって、大村、泰平に移転する向きもあった。しかし職を失っては生活に困るので、子持ちの貧乏人は二次疎開などできず、そのような事情から引き揚げる日まで居止まり員林にお世話になる者が多かった。

わが家では五女スエ子、二男信治は員林国民学校に、四女リツ子は彰化女学校に入学させ、長女経子は東公学校教員に（俸給六十円）、三女米子はパイン会社事務員（俸給六十一円）にそれぞれ就職して生活費を支えてくれるのであった。特に教員宿舎まであてがってもらい、家族だけの水入らずの生活に入りやれやれと安堵したものの、家族がマラリアに苦しめられ、スエ子の死の悲嘆、八重山に居残る義姉のマラリア死、主人、弘子のマラリア重態の消息、東京在の息子家族の心配、とあって千々の思いに心は乱れ、狂人のようになっていた。

スエ子は兄弟姉妹中、もっとも頭の良い、体の強いやさしい末娘であった。石垣小学校でも優秀児として折紙つきの子であった。員林国民学校に転入して十日と経たぬ間に珍しい優秀児が疎開して来ていると市内にまで噂に上がるほどであった。

ある日、町役場の庶務課長夫人、郵便局長夫人方が、わが家を訪れて来られ、スエ子と自分らの娘を友達にしてもらい、台中女学校受験準備をさせてくれとの依頼であった。スエ子だけは琉球人としての差別や蔑視を受けず、人気者であった。

そしてある日の夕食時に、スエ子はうれしそうに言った。「今日のソウシジュの皮はぎ作業中、校長先生が『お前が沖縄から来た宮城スエ子か。お前は皮はぎが格別上手のようだが、一つ校長にも教えてくれないか』と言われましたので、私は皮はぎ上手ではありません。はぎ易いのを選ぶのが上手ですと申しあげて、校長先生にはぎ易い樹を教えて上げました」とのことだった。

その次の作業の十一月一日に皮はぎから元気がなくひょろひょろになって帰り、そのまま縁側に横たわってしまった。足を洗ってやり、抱き抱えて床につけてやると、ぶるぶると震えて四十一度の高熱が出ていかにも重態のように見受けられた。そこで、医者よ薬よと騒いだが夜のことではあるし、それに疎開者の診察は午後からの一回往診と定まっていて、いくら焦ってもどうにもならなかった。あくる日の往診に見えた紫雲院の医者は悪性マラリアだから注意しろと言い捨てて帰った。脳症を起こさないようにと夜を徹して必死の看護に当たったが、熱は下がらず血尿を出し悪化するはかりであった。罹病三週間にして二十一日午後四時、四十一度の熱を出しながら急に「お母様死なさないでよ」と叫びな

がら、そのまま心臓麻痺で最期となってしまった。

この残酷な痛恨事に精神錯乱してなすことを知らず、途方にくれているところへ、経子の学校の校長先生初め職員総動員で手分けして葬儀の万事万端、通夜、葬儀、骨拾いに至るまで、まるで校葬のようにお世話にあずかり、なお員林国民学校の職員、学友、父兄、町役場吏員方も参加していただいて盛大な人並の葬儀を営んでくださるのであった。友情のありがたさ、人の情けの尊さを今更のように深く感じ取り、大事な思い出の一つとして心肝に銘じている。

重なった災難

スエ子の死で悲嘆の涙の明け暮れで二週忌を迎えたその日から、四女リツ子がマラリアで病床に就き、また重症である。その驚きと心配で涙はふっとび、目を張って強い母に戻って必死の看護に当たった。やっぱり思わしくない不安な日が続き、もしものことがあったらどうしようかとうろたえているところへ、友人の我那覇さんが院長先生から特別に分けていただいたという特効薬を持参してくださった。それで命拾いすることができた。我那覇さんは彰化病院の看護婦長だった。

その後、親戚の森田さんからも特効薬を郵送してもらった。二人のご恩も感謝の思い出となって胸底に納まっているのである。

明けて一月、二男信治がまたマラリアで就床、続いて長女経子もかかり枕を並べての病床であった。幸いにして先にもらった特効薬のおかげで今度は割に早目によくなったが、信治が再発をくり返し長引いたが、大事にならなくてすんだ。

三ヵ月も欠席した信治が進級したので初めて一息というところへ、今度は郷土からの不祥の手紙を受けた。三ヵ月ぶりの便りで四月二十八日付けの手紙が五月八日に届いた。「八重山は毎日のように爆撃を受けている」との内容のもので、それで郷里もいよいよ危機であることを知り、居残る家族、東京在の長男家族の身の上を案じて、矢も楯もたまらなくなり憂鬱の毎日であった。

そこへ人伝いに、八重山の家族三人とも避難先でマラリアで重態とのことを聞かされて、いよいよ不眠症にかかり、ノイローゼ気味になって、庭先の樹が枝先を地面に伏せたり起き上がったり、家が揺れて自身は地の底に入って行くようで何かを固く振りしめないではおれない状態にまでなってしまった。

子供たちは狼狽しながらも総動員で必死の看護に当たり、先にいただいた特効薬で割に軽く私を回復させてくれた。まだ元気づかない中に八月十五日の敗戦を聞いた。残念だと泣きながらも終戦だと思ったらうれしくもなるのであった。

終戦当時の台湾

八月十五日敗戦の玉音を聞いた員林公学校では「日本人職員は泣く、拳骨で怒る、残酷だと叫ぶ、つまらないと溜息で嘆くなど、みんな精神状態が乱れている。反対に台湾人職員はうれしそうにぴんぴんしてあちらこちらに群がって囁いているのでよけい腹が立つ」と泣き泣き経子は帰宅して話すのであった。

私もがっくりきて何のための疎開であったか、勝つまではと艱難辛苦を切りぬけようと